

忘れぬうちに（上）

河内愛子

1 あるホームカミングデー

彼女は生き生きしていた。「根づいた花」の資料を求めて、ミス・ロバータ・L・スティブンスは、二回、仙台と合衆国ペンシルヴァニア州のアメリカンバプテスト資料館を往復した。過去に尚綱しやうけい女学校で働いた宣教師方の、報告文書、私信その他の本のコピーを山ほど持ち帰り、古い「むつみのくさり」や人々の記憶などと合わせ、読み込むのに一心不乱だった。現存者のほとんどいない出来事を掘り起こし、想像するのは難しい。だが彼女が一番途方に暮れたのは、太平洋戦争末期、宣教師不在の尚綱、一九四四年、四五年のことだった。私が尚綱女学校に入学したのは四三年四月だが、「学徒勤労働員」の波を頭からかぶったのは、一年上と二年上の学年、特に二年上級の百四十七人であった。本科四十七回の卒業生である。

一九四三年六月、時の東條内閣は「学徒戦時動員体制確立要綱」を議会にはかることなく閣議決定した。九月には大学・高等専門学校男子学生の徴兵猶予を停止、十月には明治神宮外苑競技場で、銃剣をかついだ学生達が雨の中を行進する壮行会が行われた。四四年十二月には、一般男子の二十歳（数え年）だった徴兵年齢が、十八歳（現在の十七歳）まで引き下げられた。男性総人口の一〇パーセントが軍事に動員される事態に、工業・農業の労働力不足は深刻になるばかり。植民地朝鮮半島から働き手が連行され、国内ではまず成人の女性が動員された。それでもあらゆる産業が危機にあった。かくて四四年三月閣議決定されたのが「決戦非常措置に基く学徒全員工場配置」であった。これは中学校・女学校三年生（今の中学三年）という勉強ざかりから勉強を取り上げ、工場で働かせよとの命令を意味した。十四、十五、十六歳の少年少女の労働力さえ、あてにせざるを得ない状況に国は追いつめられていた。

だから尚綱の四年生は、もちろん四四年の四月には既に机・本・ノート・鉛筆をいっさい取り上げられ、教室の外、仙台市内長町のゴム会社で働き始めていた。しかし戦況はさらに悪化、十一月に入ると彼女達は故郷と家族から離れて、神奈川県茅ヶ崎の「東京計器」なる軍需会社に送られることになった。災難は尚綱にだけ降りかかったわけではない。命令は一校の例外もなく、全国の中学校・女学校から幼い少年少女を連れ出したと思われる。一九六八年広島平和記念公園の対岸に建立された「動員学徒慰霊碑」の碑文によれば、動員された少年少女の全国総数は、およそ三百数

十万人と記してある。

「なぜ尚綱ともあろう学校が、そんなにおとなしく生徒達を送り出したのか？ 少女達はどんな気持ちだったのか？」を一九四八年生まれのアメリカ人ステイブンスさんはわからない。経験者に直接話を聞きたい、と彼女は言った。卒業後も母校には一番愛着の薄い学年と、私は聞いていた。それでも、つてを辿ると二十人以上が健在で仙台にすることがわかった。ステイブンスさんの希望を聞いて母校に集まってくれるという人達がいた。

四四年秋、尚綱女学校四年生の百四十七名は仙台駅を發つた。宮城県全体では二千名。彼女達は四五年三月、工場の中で卒業証書を受け取った。進学者・病人を除くと全員が家に帰されなかった。その日から五十七年も過ぎている。二〇〇二年の夏だった。

『尚綱百年史』刊行の実務も担当している嶺岸久子さん、翻訳係の私、ステイブンスさんの三人はいそいそとお茶の用意をし、机を並べた。澱の河原（広瀬川）を見おろす三階の教室を使わせてもらうことになっていた。吹き込む風がさわやかだった。一人また一人、あるいは数人で七十歳を過ぎた人達がややこわばって入ってきた。昔の私をおぼえていてくれる人がいて、びっくりもした。開会礼拝は、時間を少しでも長くとりたく、今回はとぼして本題に入り一人ずつの自己紹介と当時

の話が始まった。

少女達は仲が良くいつも助けあった。石けんがなく油まみれ、カーキ色の作業服に戦闘帽、防空頭巾を手離さず、学徒動員の歌を歌いながら、朝早く工場に通った。旋盤工と同じに。会社も概して親切で、付き添いの先生方もやさしかった。ただ会社も先生も手の打ちようがなかったのは、日ましにひどくなる空襲と、乏しくなるばかりの食事だった。主食は雑炊かうどん、お菜はおひたしと漬物という具合になっていったから、たちまちお腹がすく。家が恋しい。家族に会いたい。でもなかなか帰してくれない。それでも共に過ごした若き日を語り合うことで、座はなごやかに盛り上がってきた。しかしステイブンスさんは、まだまだ聞きたいことがある。

「学校にいた頃、皆さんも校門を出入りするたびに天皇の写真の方角におじぎをしていたんですか？」

きびしい答えが返ってきた。誰だったろう？

「ヒロシマに原爆を落としたアメリカ人のあなたが、今頃わざわざそんなことを聞かれるんですか？ ほんとは私は今日だって来たくはなかったー」

なぜかその人は、ヒロシマがこうむった筆にも言葉にもつくせぬ残酷な大量殺戮への痛みと怒りを長い年月、放さずにきた人らしかった。

ステイブンスさんの全身が固まった。こういう言葉は予期していなかったから。彼女のため、わ

ざわざ集まってくれる卒業生に会うことを楽しみにしていたのだから。司会の私もとっさのことに何と言っているかわからなかった。シンとなったその時、誰かがおぼろげ口を開いた。

「こういうものを持ってきたんですけれど」

それはザラザラと黄ばんだ封筒に入った手紙の束だった。茅ヶ崎から仙台の母に書いた十通以上の手紙。母の遺品を整理していた時、出てきたものと言う。白けた座がいくぶんやわらいだ。一通を読んでもらうことになった。薄れた鉛筆の字でつかえつかえその人が読み終えた時、私はひどく感動していた。不安なひもじい日々を生きている少女の、家族を思うやさしき、友達へのいたわり、今の若者にはない言葉の温かさ。

これらの手紙の束が現れたことがつくづくありがたかった。だが、話し合う時間はもうなかった。はかばかしい挨拶も笑顔もなく私達は別れた。良い会でしたね、と三人して喜び合うこともなく、そのまま帰った。

ホームカミングデーは前日だけでは終わらなかった。

翌朝早く電話が鳴った。

「あなた、昨日は私達を侮辱してくれたわね。みんな怒って帰ったのよっ」

会の打ち合わせで一度電話で話したSさんの声だ。女学校時代学年のトップで県立女専に進んだ、

今に至るもリーダーと聞いた。今回も彼女が呼びかけて二十人も集まってくれたらしい。ずいぶん威張っている。何か失言をしたかしらん。みんなを怒らせたとは、ただごとでない。昨日の帰りはみなさんで食事をしたそうさ。考えてみる。昨日、何人もの話のあいだにひよっと私は尋ねたのだった。

「工場では何を作っていたんですか？」

「飛行機の部品でした」

思わず笑った。

「十五歳か十六歳のなんにもわからない女の子の作った部品で、いったい飛行機が飛んだのかしら」
ホームシック、飢え、空襲の恐怖にも不平も言わずひたすら頑張ったのは、お国のためという一途の思いがあったからこそ、その乙女心をあなたは笑いのにした、と彼女は言う。

あなた達を笑ったなんて、そんな……。二度と取り返せぬ十五、十六歳の勉強や楽しみの貴重な時間を根こそぎ奪って、そんな無意味な仕事を命じていた国家の、あまりの愚かさに呆れて笑ったのです、と言いついても聞いてもらえそうにない。このままいくときつと喧嘩けんかになる。癢しやくにさわるが謝ることにした。

「みなさんのお心をそんなに傷つけたとは気がつきませんでした。申し訳なかつたです。すみませんでした」

電話はガシャンと切れた。

そのあとステイブンスさんは「根づいた花」に、Kさんの手紙一通を全文引用したあとに「茅ヶ崎のこの少女達の献身、忠誠、純なところ、自分たちの生まれた国への愛は、彼女達を第二次大戦下の多くのヒロインの仲間に入れ、勝者とした」と書いた。いささか首をかしげながら、私はそのまま日本語に直した。彼女はそう思ったのだから。

2 出逢い

「尚綱女学校一年生のあなたをおぼえていますよ」

電話のむこうの明るい声が言った。先日集まりの人だ。ひやつとする。また何か？ かまわず彼女は続ける。親がギリシヤ正教会の信者だったので尚綱に入った。夫が数年前亡くなったから、今は一人暮らし、子供はいない。目下の生き甲斐は、大正琴の稽古と美輪明宏なんですよ。おやまあ！ 七十代でもそういう人がいるんだ。

「先日はSさんが失礼な電話をあげたことを聞きました。私達みんなが怒っているとか申し上げたそうで、そんなことはないんです。もう一人の友達とお詫びに伺いたくて。いかがでしょうか」

なるほど、Sさんがあんまり怒って興奮していたから反論もできずまわりは黙って聞いていた。沈黙は同意ととられる。どこにもある風景だ。もちろん私は嬉しかった。彼女Gさんはどこに座っていた人かしらん。

数日後、Gさんと、母への手紙を持ってきたKさんが、はるばるゴデイバのチョコレートまでおみやげにして来てくれた。三人で来し方をいろいろ話した。それぞれに悩みや物語がある。見ず知らずとは言い切れぬつながりがあった。以来、私達は年に二、三回は会うようになる。Gさんは、ほんとに美輪明宏の追っかけだった。次々と彼のテープと著作が送られてくる。おかげで美輪氏にずいぶん明るくなった。息せき切った電話も来る。

「○○チャンネルこれから美輪さんが出るから見てください」

あちこちにかけてる上に、自身が見そこなっては一大事だもんね。

とめどない話を何となくおかしがって聞いていると、彼女は一生懸命に言う。

「美輪さんは長崎の原爆の被爆者で、ほんとの反戦なのよ。ほら、テープの中の彼の作った従軍慰安婦の唄もとっても良いでしょう。聴いてくれた？」

そして私はとうとう仙台の何とかホールで、Gさん、Kさんと三人並んでお芝居「黒蜥蜴」を観ることになった。

「友達にチケットをたのまれて取ってあげたら、都合で行けなくなってね、誰かにあげると頼まれたの。あいちゃんにはどうしても彼の素晴らしさを見せたいの」

Gさんは資産家の未亡人でもなく私の分までチケットを買う余裕があるとも思えないから、その話を本気にして出かけたのである。実はあの高価なチケットは彼女が買ってくれたのかも、と今は思う。残念ながら満員の大ホールで芝居のせりふはほとんど聞き取れなかった。「黒蜥蜴」観劇何度目かの二人の楽しそうな姿が見られたのは良かった。そういうGさんだが、ほかにだって幾つも大好きなものがあった。たとえば、世界的オペラのプリマ、マリア・カラス。彼女が聴くのはLPかCDであるが。大ブレイク中のピアニスト、フジコ・ヘミングのこともずいぶん聞かされた。私もフジコさんのピアノは相性が良くCDを何枚か買っていたから話が合った。

とにかく、美しいものやおいしいものに目がなく夢中になる彼女は、昭和初期の少女がそのまま七十代になった不思議な面白い女性だった。誘われたおつきあいでも、ホームカミングに同級生と尚綱まで来たものの、彼女はほとんど口を開かなかったみたいだ。恐らく茅ヶ崎時代の十五歳の彼女は、心の底ではこんな戦争大嫌いと呼んでいる反・軍国少女だったに違いない。年中作業服一枚で機械を動かす生活は、幼いながらに彼女の好みと正反対だったのだと思う。

おたがい調子を悪くして会えなくなる少し前のことだった。Gさんは彼女が通っているギリシャ正教会のイースター前夜祭の話をしてくれた。私の記憶がどこまで正確か大して自信はないのだが。「イースター前夜はね、コワイヤー（聖歌隊）が徹夜で歌い続けるの。信者はほとんど立ちっぱなし。そしてイエス様のよみがえった時刻でしょうね。夜明けの光がさっと射してきた時、主様がひれ伏して大地に接吻なさるの。何とも言えない美しい瞬間よ」

Gさんのキラキラ輝いた眼を思い出す。なつかしい。もう私の言葉は届かなくなってしまった。あの頃の彼女に会いたい。

初めて二人が訪ねてくれたあと、私は尚綱にKさんの手紙の束の保管をお願いしてみたが、資料室を作る余裕がないので無理とのことだった。それから思いついて戦災復興記念館（仙台市）に電話した。次々持ち込まれる思い出の品で倉庫（？）はパンク寸前とおことわり。私は粘った。当時の少女のけなげな息づかいを燃えるごみで煙にしたくはない。

「手のひらに乗るぐらいで、分量なんかないと同じです。一度手にとってごらんになって下さいませんか」

KさんとGさんは全部のコピーをとり、実物を持って行った。手紙の束は、預かってもらえることになった。Kさんはそのあと同級生に会っては、当時の記憶を新しく掘り起こして伝えてくれた。

足の悪さと夫の介護で外出がままならぬ棟方郁さんの所から当時の日記帳まで借りてきた。

好き嫌いのはっきりしたGさんと対照的に、Kさんは自己主張の少ないおだやかな人だった。助けを呼ばれる前に、さっと身体が困っている相手の傍に行っている共感力。棟方さんの日記も冊子にしておけば残るのに印刷屋にはさっさと断られた。字は消えかかっているし、昔の漢字は読めない。パソコンの出来ない私が困っていると、思いつきもしないうちに「私が書き写しましょう」と言ってくれた。Kさんの字は確かに美しく読みやすい。嶺岸さんも手伝ってくれて「十七才の日記」がで上がった。Kさんはそういう人。同級生からも職場の人からも信頼され愛されている人であることが、日と共にわかってきた。聞くところによれば、同窓会総会に毎年、小柄な彼女は一人でリュックを背負ってあらわれる。同級生の姿はまずない。昔の先生もいない。顔見知りの後輩とは声をかけ合うようだが、淋しくないですかと聞かれると、彼女はにこにこして答えるらしかった。「学校がなつかしくしてくるんですもの。淋しいとか思ったことはないですよ」

彼女もまたしつかりと、自身の意志で動く人なのであった。

二〇一一年の大震災を境に、Kさん、Gさん、私とみな健康をそこね、一緒に食事をする機会はなくなってしまった。文通や時折の電話はあるが、淋しい。でも私の思いは変わらない。七十年代、八十代であろうが、人と人は出逢うべくして出逢う。それは天から降ってきた恵みとしか考えられない。

河内愛子（こうち あいこ）一九三〇年、仙台市生まれ。一九五九年に夫の仕事で山形市に移る。八十歳まで自宅で中・高生の英語教室を続けた。現在、市内南栄町に猫と二人（？）暮らし。